

「おにーさん、オチンチンが見えないよ！
手をどけて！」

「ダメだよ！ リリムちゃん」

立ったものを見られたくなくて、
ぼくは必死に抵抗した。



「もう、身体をバタバタさせちゃダメ！」

だが、すごい力で抑え込まれ

身動きはあつという間にとれなくなってしまうた。

「サキユバスの力は人間よりずっと強いんだよ。

だから、こーやって抑え込むと動けないでしょ？」

「よーし、」からおにーさんのオチンチンと
またご対面しますす♪」

「ちょっとリリムちゃん止めてー!」

「さっきはチラッとしか見れなかったけど
今度はじっくり見るね☆」



「やっぱり長さとかきは平均よりもやや上って感じだね
ちよっと残念」

「でも亀頭は大きい♪ 特にかりがいい形してる!」

「立ちもすしね。お腹に反り立ってる」





「じゃあ次は触った感じを調べなきゃね。
今から手でいっぱいオチンチンをしごいてあげるよ。」

「おめつとよさ」



「うわ！ すっごく硬い…」

「言ってる」とオチンチンが真逆だよ」

「うや…これは…」

「おにーさんのオチンチン
本当にすっごく硬いよー」

「美味しそう！ ジュルツ…」

「思わず生唾飲んじゃった」

「リリムちゃん本当に止めて」

「とか言いながらオチンチンは
どんどん硬く熱くなってきてるよ」

「それでも嫌なものは嫌なの」





「うーん、強情だなあ」

「わう、め、だからだ」

「どう、身体をもっと強く密着させてみたよ」

「ああ…」

「アハッ、わたしのおっぱいの感触とか匂いとかで
いっぱい興奮してるね」



「いや、ぼくはもっと大人の女が好き…」

「嘘いっちゃダメ。おにーさんは
わたしみたいな娘が好きに変態なんですよ？」





「キヤツ…オチンチンが
ピツクン、ピツクンしてきた」

「変態って言われて嬉しかったんだね、
でも…」



「もう少ししじごいた方が美味しくなるから
まだ出したらダメ！」

「うわああッそんなに強く握らないで！」

「ダメ！ ギョツとしなきゃ
絶対射精しちゃうもん！」

「それに…ギョツとしたら

オチンチンはもっと元気になったよ

痛いのが気持ちいいんでしょう？

おにーさん本当に変態だね」



「ぞ、そんなことな…うああ！」

「嘘！ 変態って言ったらまた元気になったもん！」

「痛い、もう止めて…」

「やだ！ まだおにーさんの
精気吸ってないもん！」





「それに、オチンチンが
こんな状態のまま終わったら、
生殺しにされておにーさん苦しんで眠るわ」

「うや、そんなことば…」



「だからわたしが
おにーさんの精気を抜いて
スツキリさせてあげる♪」

「だいたいじょじょじょ」



「うわッおにーさんのオチンチン、
ビクビクするくらいにピクピク波打ってる」

「はあ、はあ…」



「顔が真っ赤だよ。息もすごく荒くなってる。
気持ちいいんだね」

「ちが、はあ、はあ、はあ、はあ…」

「表情も可愛い♪ 気持よすぎて逝きたいのに
逝けなくて苦しそうな顔してる」

「ちが、やめ」

「待っててね。もう少しで沸き上がってきてるの
全部出してスッキリさせてあげるから」





「わー!」
「んんー!」



「はあ、はあ…」

「すごい勢いで飛び散ったね」

「生臭い、いい匂いがする。」

「すっごく熱くて粘っころ。」

「触ってて本当に気持ちいい」



「味は…すっごく濃い！ 美味ーっ！」

「ズズズ…ッ」

「うーんこれはもう夢中になっちゃう」



「おーさんありがとー!」

「満足したんだ…じゃあこれで…」



「なに言ってるの？ 今からやっと搾精がはじまるんじゃない！」

「んーん」